持って、歩いて、ひもとこう。

おおいた豊後大野ジオパーク
Oita Bungoono Geopark

BUNGOONO GEOSITEFILE
豊後大野ジオサイトファイル

大迫磨崖仏

OSAKO MAGAIBUTSU / CHITOSE

おおいた豊後大野ジオパーク
Oita Bungoono Geopark

周辺情報

寄って帰ろう！

千歳町特産物直売所

地元で穫れる新鮮な野菜が安く販売されるほか、「はと麦茶」や「はと麦味噌」などの特産品も豊富。

豊後大野市千歳町長峰1409番地
0974-37-2178
P10台 営8:30～17:00

光林寺のしだれ桜

見頃を迎える3月下旬～4月上旬には、樹齢約300年にして荘重に咲き誇る姿を観ることができます。

豊後大野市千歳町長峰 2670
0974-37-2710
P5台

おおいた豊後大野ジオパーク推進協議会 https://bungo-ohno.com
〒879-7198 大分県豊後大野市三重町市場 1200 番地 豊後大野市商工観光課内
TEL 0974-22-1001（代表） FAX 0974-22-1426

おおいた豊後大野ジオパークガイド
TEL.080-2708-7809

OSAKO MAGAIBUTSU / CHITOSE

こわれかけた お顔が 伝えること。

豊後大野ジオサイトファイル

大迫磨崖仏（おおさこまがいぶつ）

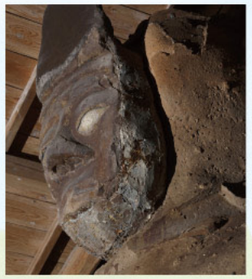
暗い洞窟をのぞくと浮かび上がる、今にも溶けてしまいそうなはかないお顔。大迫磨崖仏は、制作年こそ詳しくわかっていませんが、大野川（おおのがわ）流域に多くある他の磨崖仏と比べて大きく違う特徴を持っています。彫刻された崖が阿蘇火山由来の溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）ではなく、もろい性質の凝灰岩の崖であることです。そのためそのお姿は傷みが激しく、独特な姿をしています。尊像は大日如来（だいにちにょらい）と推定され、牛馬を守る仏として信仰を集めました。

市内ではめずらしい、60万年前の火山噴火堆積物。

大迫磨崖仏が彫刻された凝灰岩の壁は、弱い固まり方をしていてとてももろいという性質をもっています。色は黄土色で、中に見られる雲母などの鉱物から、大野川流域で多くみられる阿蘇火山から出た「阿蘇火砕流堆積物」ではなく、約60万年前に現在の由布市由布岳あたりにあった火山が噴火し、火砕流が大野山地を越えて流れて堆積したものであると考えられています。同じ成分の厚い層が、市内緒方町知田で見つかっていることから、この堆積物には「知田火砕流堆積物」という名前がついています。

① 大迫磨崖仏

大迫磨崖仏が彫られた崖は弱い固まり方をしていて脆いため、麻などの繊維を混ぜた粘土（塑土と呼ぶ）を塗って表面を仕上げる、「石芯塑像」という技法で作られています。横から見ると、お顔にはお面のようなものがはり付けられているように見えますが、体とのバランスがとれておらず、最初からこのような顔つきではないと考えられます。

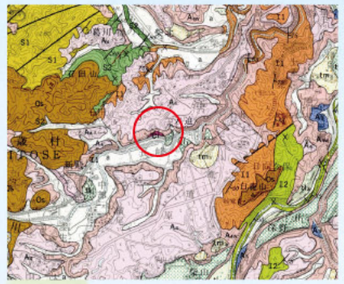


大迫磨崖仏周辺の地質図

赤い丸印の場所、濃いピンク色に塗られている部分が大迫磨崖仏の位置です。そこを囲うようにある薄いピンク色は、阿蘇火砕流堆積物の広がった範囲です。知田火砕流の地層がめずらしい地質であることがわかります。

右記の地質図は下記の著作物を利用しています。
産総研地質調査総合センター
1／50,000地質図「犬飼」

CC BY ND



ほんとのお顔はどんなだったのかな。

ジオガイドさん

④ 湧水と磨崖仏の関係

おおいた豊後大野ジオパークには多くの磨崖仏（崖に彫られた仏様）がありますが、その磨崖仏の近くには必ずといっていいほど湧き水があります※。どうして水のそばに磨崖仏を彫ったのでしょうか。

理由を限定することはできませんが、湧き水はとても大事な場所であり「枯れないで欲しい」という願いや、「誰かが独占しないように」、「汚されないように」など、人々の様々な思いが背景にあったと考えられます。少なくとも、磨崖仏を彫ったから水が湧いてきたとか、神社を建てたから水が湧いてきたというわけではなく、湧き水が出る場所に対し特別な気持ちで接していた結果、わざわざ「崖に仏様を彫る」という行為がなされていったようです。

※そばに湧き水がある磨崖仏
菅尾磨崖仏、宮迫東西石仏、犬飼石仏、普光寺磨崖仏、落ル水磨崖仏、切小野谷（今山）磨崖仏など。比較的古い時代に造られたと考えられる磨崖仏に湧き水が在ることが多い。

② 周辺で見られる地層

大迫磨崖仏の建物の上にある岩盤は、約9万年前の阿蘇火山の巨大噴火で噴き出した火砕流が強く固まったもので、溶結凝灰岩といいます。その下には、火砕流の先端で岩がぶつかりあってできた砂利の層があります。さらにその下には知田火砕流の地層があり、大迫磨崖仏はこの地層に彫られています。

③ 柱状節理

阿蘇火山がおこした約9万年前の巨大噴火では、九州島をおおうような巨大火砕流が発生し、九州地方を中心に大きな影響を与えました。火砕流は高熱のままとどまったため、自分自身の熱で再び溶けじょじょに冷えていきました。その時、上下から冷えることで収縮し縦方向の亀裂がはしり、まるで鉛筆を束ねたかのような姿となりました。これが柱状節理と呼ばれるものです。

黒ウンモ

磨崖仏と岩窟を形成する「知田火砕流」をよく見るとキラキラした金色の粒が混じっています。これは「黒ウンモ」と呼ばれる火山性の鉱物です（写真参照）。

岩窟の火山灰を指先で触れると、肉眼でもキラキラと光っているのがわかります。他にもこの火山灰はガラス質を多く含む特徴があります。豊後大野市では、ここ千歳町大迫と緒方町知田でわずかに見ることができます。

建物横の壁

建物の上